

第二回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

宇佐美 斉 著『落日論』 (1989年6月15日 筑摩書房 刊)

宇佐美 斉 うさみ ひとし 昭和17年(1942)生まれ。愛知県出身。専攻は、フランス文学。京都大学文学部仏文科卒業。同大学大学院修士課程修了。京都大学人文科学研究所助教授(受賞時)。現在は、京都大学名誉教授(同人文科学研究所名誉所員)。著作は、『立原道造』、『詩人の変奏』、『フランス詩 道しるべ』、『作家の恋文』、編著書に『アヴァンギャルドの世紀』、訳書に『ランボー全詩集』、他がある。

受賞のことば

拙著『落日論』(一九八九年、筑摩書房刊)で、第二回の和辻哲郎文化賞を思いがけなくも授かったのは、今から二〇年ちかくも前のことです。当時の喜びと感謝の気持ちをそのままに再現することはもはや不可能ですが、いただいた励ましに勇気づけられてこれまで生きてきました。選者の梅原猛、陳舜臣、故・司馬遼太郎の三氏への感謝と敬愛の念にも、もちろん変わりはありません。

当時の私は、勤務先の京都大学人文科学研究所で長く続いた共同研究、ボードレー『悪の花』註釈研究からようやく解放されて、ランボーを中心とするフランス近代詩への固有のアプローチを、「時間論」を基軸にして行おうとしていました。『落日論』はその最初の試みであり、ロマン主義、象徴主義、アヴァンギャルド芸術へのその後の私の考察は、すべてここを起点にしていることをあらためて確認します。姫路市民と関係者の皆様、本当にありがとうございました。

※本誌の為に執筆。

《選考委員評》

知の成果

司馬 遼太郎

人間のくらしと精神、あるいは思想に重要な要素をなすつづけてきたのが、落日である。著者はときに「日没」ということばもつかう。陽は、西へ沈む。著書は日本語とその方言、あるいはヨーロッパ語の中から「西」ということばの潜在的なイメージをとりだして、結局それは、下へ、消え去って、失せて、去ぬ、といったイメージにおいて共通するということを、確かめる。

同時に、落日は華やかでもある。落日に輝きやくるめきを感じ、西方が日没の方角でありながら、同時に明るさを覚えるという「両価性」の感情を人間はもちつづけてきたのである。

西方あるいは日没、または夕日は宗教化されもした。著者はインドにおける宗教的落日観照の現象にふれ、また大阪の四天王寺の西門における落日信仰についてふれる。

落日の方向(西方)をもって他界がそこに存在するとした信仰は、インドや日本だけでなく、古くは諸民族のあいだにひろく存在した。

著者は、そのような足場を堅牢につくりあげてから、ヨーロッパや、ときに日本の文学作品を渉猟して、人間が落日に感ずる鑑仰とその反対感情を言語の果実のなかからさぐりとして、最後に世紀末といった大きな時間内での問題まで暗喩的に構築する。

著者のなみなみならなさは、文学研究者らしく感性的世界に遊ぶゆとりを示しつつ、それを流動体にせず、『落日論』を一個の思想的収穫として(論理的結晶体として)読者の前にわかりやすく、ほとんど物体のようにして提示したことである。

著者の少年期、あるいは京都での日常、また留学中のヨーロッパでの随想的低徊のなかで、たとえば日本の浄土信仰が西方だけを聖別したこと、ヨーロッパでは教会の尖塔においても見られるように、天への垂直があることなどをのべつつも、それらの印象を、感覚だけに放置することをしない。

著者におけるあふれるような情と意が、すきとおった知によって統御されている点、和辻哲郎の名を冠した賞にこれほどふさわしい作品はない。

むろん、文章も明晰で、しかも肺の呼吸のようなリズムをもっている。

陳 舜臣

和辻哲郎のすぐれた業績の一つは、文化の風土的特性と普遍性とおさえて、考察することにあつたとおもう。

風土的特性の振幅が広ければ広いほど、収斂されて普遍性にいたったときのカタルシスが大きいものである。それが和辻哲郎の著作の魅力となっている。

宇佐美斉氏の『落日論』は、その意味で、和辻哲郎文化賞に最もふさわしい作品であるといえるだろう。

折口信夫の「死者の書」の落日からルソーの密林に沈む夕日までの幅があり、浄土思想の水平的なパラダイス志向にたいして、ヨーロッパ建築の尖塔に垂直的なパラダイス志向をみるという発想は、私たちに和辻のスケールと方法を連想させる。

フローベール、ボードレール、マラルメなどを論じるのは、フランス文学者の著者としては守備範囲のものだが、ドストエフスキーから檀一雄、庄野潤三、そして萩原朔太郎など日本の現代詩にまで考察がひろがり、それも撫でるような文芸批評ではなく、深く掘りさげた作業が好ましい。著者は奥底まで掘りあてたつもりはないであろうが、私たち一般の読者の知的好奇心は、じゅうぶんに満足させられた。ただ三島の赫奕たる太陽の弱さについて、もうすこし立ち入ってほしかったとおもうのは、私一人だけではないだろう。

精神の普遍的な働きにせまり、人間の魂の原型をもとめようとする著者の試みは、本書ではまだ基礎工事の段階のリポートであろう。構築の手並みを見たく、私たちは心を躍らせて待ち望みたい。なお李商隱の「夕陽無限好」（楽遊原）に代表される中国詩人の落日偏愛（李白の「落日故人情」王維の「蒼茫对落暉」杜甫の「夕陽薰細草」など）にもふれてほしかったが、隴を得て蜀を望むたぐいであろうか。

梅原 猛

今回の候補作品の中で、宇佐美斉氏の『落日論』はとりわけ新鮮な印象を私に与えた。『落日論』という視点から近代の文学作品を見るのは甚だ鋭利な視野であり、一つの文明批評を形成しているのである。

著者の言うように、古代人は、生・死・再生の円環的時間を信じた。古代人は、落ちる日に死のイメージを、昇る日に再生のイメージを見て、それゆえに、落ちる日と昇る日を同時に崇拝したのである。近代人は、このような円環的時間を信じず、進歩という直線的な時間信じた。しかし、進歩ということすら信じられなくなった近代人は、絶望の心を抱いて落日を歌いあげるより仕方がない。このような宇佐美氏の『落日論』の基本的発想は、近代の文学をというより、近代の終焉を告げる文学を見る新しい視点であることは間違いない。

この『落日論』の白眉はやはり、フローベールとボードレール、ドストエフスキーとマラルメ論であろう。四人の文学者に対する落日という見地からの宇佐美氏の解釈は、フローベールについても、マラルメについてもあまりよく知らない私にはかれこれ批評できないが、この著書を読む限りは的確な批評であり、氏の文学についての、なかんずく詩についての感受性は高く評価してもよいと思う。この本に多少不満があるとすれば、やはり日本の古典についての考察が足りないことであるが、フランス文学者である宇佐美氏には、この著以上に日本に対する学識と理解を要求するのは少し無理であり、今後の氏の仕事を待ちたい。

この著書の中にある歌人、春日井健についての論文によれば、氏は、春日井健の落日を歌った強烈な歌を発見したのは高等学校時代であるという。してみると、落日論の発想は高校時代にさかのぼるというのであろうか。一つの着想をずっと問題として、何十年かかけて一つの著書にする、こういうむしろ地道ではあるが甚だ華麗でもあるこの著書を第二回の和辻哲郎文化賞の当選作とするのは真に喜ばしいことである。